

令和6年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立別所中学校
-----	-----------

1 学校教育目標

夢と感謝の心を持ち 知・徳・体の力をつけ 自立して共に生きる生徒の育成		
(1) 子どもたちの挑戦や自己実現を支える学校	(2) 安心・安全で、規律ある学校	(3) 保護者・地域から信頼される学校

2 本年度の重点目標

(1) 基礎基本の定着を基にした、個別最適な学びや協働的な学びの充実	(4) 特別活動における学校行事・生徒会活動・部活動の充実	(7) 小中一貫教育推進校としての繋がりのある9年間を見通した教育活動
(2) 生徒理解に基づいた生徒指導	(5) 保護者・地域との連携	
(3) 自他を大切にす道徳・人権教育・特別支援教育の充実	(6) 美しく、生活しやすい環境づくり	

3 自己評価結果(達成状況) 【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	① 基礎基本の定着をはかる学習指導の工夫・研究	① 今年度は、9年間を見通した授業づくりをテーマに、基礎基本の定着を図ることを重点目標とした。国語や数学、英語の授業では、小テストによる基礎基本の定着と主体的に学ぶとする姿勢の育成を目標に、学習内容の復習を授業の初めに取り入れた。さらに、小中での連携を通じて、中学校に入学して有効な学習内容を、中学校側から自主学习の内容を具体的に提案した。小学校から中学校へのつまづきが少なくなる取組を行った。 モジュール学習ではAIドリルを活用し、生徒一人一人の理解度や学習到達度に応じてそれぞれの学習課題に取り組んだ。	B	① 授業での小テストを毎回行ったことで、宿題だけではなく、先を見通した学習を意識できるようになったと感じる。今後もこのような基礎基本の定着をはかる取組を継続していく。
	② 補充学習と家庭学習への取組	② 数学・英語を中心としたStep Up Time(放課後の補充学習)では、基礎的な学力をつけることを目的として学習に取り組んだ。自主的に参加する生徒もおり、個々の苦手克服のために学習できた。しかし、週1回の時間の確保が難しい月もあり、開催が少ない月もあった。 3年生を対象とした放課後学習のJump Up Timeでは、自主的に参加する生徒が多く、個々の学習に前向きに取り組んだ。 夏季休業中の補充学習では、学年ごとに開催日や時間を設定し、生徒の学力に応じた個別最適な取組を進めていった。		② Step Up Timeにおいては、週1回の時間の確保に努め、計画的に行いたい。Jump Up Timeは引き続き実施し、生徒のニーズに合わせて学習を進めることができるよう工夫していく。夏季休業中の学習においては、今年度同様、生徒が参加しやすい時期や時間帯を検討し、基礎学力の定着をめざす。また、数学・英語だけではなく、他の教科においても実施することを検討する。
生徒指導	① 生徒理解に基づいた生徒指導の推進	① 普段から生徒との関りを大切にするとともに、カウンセリング等を活用して、問題行動の未然防止に努め、発生したトラブルに対しても早期に対応することができた。3年目となった校則を見直す活動では、全校生徒で話し合う機会を持った。話し合いの結果、変更する校則はなかったが、ルールの本質について考える質の高い話し合い活動を行うことができた。	A	① 引き続き個々の生徒理解に基づいた丁寧な対応を行い、問題行動の未然防止に努めていく。SNS等、ネットモラルについては、生徒の実態を把握しながら、適切な情報モラル研修等を計画し、継続的に実施していく。校則等の見直しをはじめ、学校生活のあらゆる場面で生徒が主体的に学校生活を営むことができるよう支援していく。
	② 関係機関と連携した不登校への取組	② 毎週不登校対策委員会を定期的に開催し、情報共有とケース会議等を行ってきた。昨年度途中から始まったサポートルームを、生徒の居場所づくりとして有効に活用することができた。開設した。適応教室、学校生活支援教員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スーパーカウンセラー、子育て支援課等と連携し対応を進めているが、不登校の要因や背景が多様化する中、状況が進展しないケース等もあり、今後も継続した取組が必要である。		② 不登校問題についてはその要因や背景が多様化しており、対応が難しいケースが増加している。社会的な自立に向けて個々に応じた目標を検討し、様々な角度から支援方法を検討していく。学習面で不安を抱える生徒も多く、サポートルームを有効に活用するなど、個々に応じてできる範囲での自主課題の設定を提案し、不安解消に努める。
道徳・人権教育	① 道徳教育の充実	① 読み物資料を中心に各学年でローテーション道徳を取り入れ、教師の指導力の向上、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を複数の教師の目で見取り、多面的・多角的に生徒を把握している。道徳教育研修会では、小中一貫教育推進校の特性を活かし、小中互いの研究授業に参加し、意見交流を深めた。また、全校道徳として「震災に学ぶ」授業を実施し、各学年の発達段階に応じて震災をテーマとして考えを深める授業を行った。長期休業では、「心かがやく」を家庭に持ち帰り、自分の感想とともに保護者にもコメントをいただくなど、家庭での道徳的価値に関する話し合いの機会となるよう連携に努めた。	B	① 生徒の道徳性に関する変容を授業のなかだけで見取することは難しい。また、日常の行動・行為などにも表面化しにくい。日常の教育活動において「継続的」な視点で、長期にわたり子どもの変化を見続けていく必要がある。また、全校道徳などの機会を活用し、授業で取りあげたテーマについて家庭でも考え、議論していく機会を増やしていく。 道徳授業のさらなる充実に向けて「考え、議論する道徳」を目指し、授業づくり、授業展開が工夫できるよう教員の指導力向上のための研修や授業研究を引き続き実施していく。また、生徒の実態に応じた資料の精選や、全体計画、各学年の年間計画を見直すとともに、小学校からの学びの連続性、系統性を考慮し、9年間を見通したカリキュラムとなるよう検討していく。
	② 人権意識の向上	② 今年度も5月に春川先生を講師として招聘し、講演していただいた。春川先生の経験に基づいた内容で、現在も根深く残る部落差別について考えたり、人と人とのつながりの大切さや人間の持つ生きる力について考えることができる時間であり、楽しい学びの時間となった。6月には、人権作文標語発表会を開催した。生徒がその場で思いや考えを発表し、自分の意見を深化させることができた。10月にはハートフル講演会を開催し、脳卒中や事故により、体に不自由が残った講師の先生の話聞いた。実体験に基づく講演に、生徒たちは感動すると同時に周りの人たちへの感謝を感じる事ができた。12月の全校道徳に先立つ形で、同和問題の歴史について知る時間を設け、その後の道徳では三木市の指定教材を使って、全学年が今もなお残る差別について深く考えるいい機会となった。		② 毎年行っている人権作文標語発表会は、お互いの思いや考えを知ることができる良い機会となっているため、今後も継続していく。今年度も同和問題の歴史についての学習をした。部落差別の非条理さを感じる事ができたと同時に、今も続いている生徒たちの身の回りの差別にも目を向けることができた。今後も自分を大切に、他の人も大切にできる言動が実践できるよう指導を続けていく。人権講演会では、部落差別だけでなく、今年度は障がいのある方の直接の声を聞くことができた。さまざまな形で残る差別に目を向け、生徒たちに根深く残る差別の実態と、自分たちがどう判断し行動すべきかについて考える機会を与えていく。住民学習で使用したDVDや隣保館にあるDVDを利用して来年度は同和問題だけでなく、その他の人権課題に関してもより力を入れて取り組む。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

<p>・自己評価の方法は適切である</p> <p>多くの評価項目で工夫した取組がなされ、成果も見られるなか、先生方の自己評価が厳しいと感じた。職員の頑張りをもっと高く評価して、教職員の様子バージョンアップに活かして欲しい。今年度の教育活動における内容では、小中一貫教育の取組が具体的に実践されており、小中一貫教育を活かした取組で成果もあげられている。今後も充実した取組を期待する。PDCAサイクルによる改善にも具体的に検討されている。</p> <p>自己評価の資料としている三者(生徒・保護者・教職員)に実施した学校評価アンケートの結果、考察についても、昨年との比較とともに回答内容の詳細にも目が向けられ、適切な評価方法であると考え。</p>

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

<p>学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価</p> <p>・自己評価および改善の方策は適切である。</p> <p>生徒の変容に着目した研究授業を小中合同で行うなど、小中学校の教員が課題を共有できるよう研修が積極的に進められている。基礎基本の定着をはかる取組を基本理念としながら、個別最適化、ICTの活用、協働的な学びの授業展開も意識されている。個々の課題にしっかりと向き合い、主体的に学ぶとする姿勢が育つための授業形態や教材の提示方法など更なる授業の工夫に期待する。</p> <p>放課後等を活用した補充学習においても、子どもたちの自ら学ぶとする姿勢を育てながら、基礎基本の定着も図られている。これまでの積み重ねをもとにタブレットの活用など更なる生徒の主体的な取組や基礎基本の確実な定着をお願いしたい。</p>
<p>・自己評価および改善の方策は適切である。</p> <p>規範意識の醸成やモラルの向上など、子どもが主体的に考えが深められる機会が図られており、教育相談やカウンセリングなど生徒に寄り添った指導も実践されている。落ち着いた学校生活を過ごすために生徒の主体的な取組を推進し、校則を含めた学校生活を見直す活動が生徒の主体性を尊重して行われている。この活動を通して自立心や判断力の育成を期待する。</p> <p>ここ数年不登校の人数は増加傾向にある。家庭の価値観が多様化し、不登校の原因も多様化しているため、個々のケースに応じた細やかな対応がなされている。多様化する子どもたちの状況に応じ、関係機関、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、不登校対策支援員や小学校との連携も図られている。今後も不登校対応や問題行動の未然防止に努めてもらいたい。</p>
<p>・自己評価および改善の方策は適切である。</p> <p>担任だけでなく全教職員が道徳の授業に関わるとともに、小中一貫教育による9年間を見通した道徳的価値の連続性を観点に取組を推進している。研究授業などで指導力の向上にも取り組んでいる。また、全校道徳や家庭との連携など、計画的、組織的に道徳教育を進めることができていく。生徒たちも前向きに取り組んでいる。今後も更なる充実にも努めていただきたい。</p> <p>人権講演会や人権作文発表会など人権意識の高揚に向けた取組を継続し、今年度も生徒・保護者とも肯定的評価が高い水準にある。今年度は9年間の系統性を意識した小中合同の授業研修などにも取り組まれており、これからも道徳人権教育の推進に努めていただきたい。</p>

特別支援教育	① 支援を要する生徒の理解と支援の充実	① 生徒が抱えるつまづきや困難について全教職員が共通理解し、特別な支援を要する生徒の把握と具体的な支援方法に取り組んだ。スクールカウンセラーや学校生活支援教員や特別支援教員補助員と連携し、情報交換を密に行い支援を要する生徒の理解と支援の充実を図った。小学校との支援情報を引き継ぎ、主体的に学びに向かう姿勢の育成と個別最適な学びに向けた授業改善に取り組んだ。	B	① すべての教職員が個人情報の保護に配慮しながら、発達障害等のある支援を要する生徒への指導が、すべての生徒にとってもわかりやすい授業につながると教師間での共通理解を図り、学校全体で組織的、計画的に取り組む。学ぶことに興味・関心を持ち、自己のキャリア形成と関連付けながら活動の振り返りを行うことで、見通しを持たせ、誰もが生き生きと活躍できる共生社会を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価および改善の方策は適切である。 個々の成長や発達等に応じた支援が常に検討され、きめ細かな学習が進められている。特に特別支援学級では特別支援教育指導補助員等を含めた教職員の支援体制が確立され、生徒が安心して学べる環境となっている。 学校生活支援教員と連携した通級指導や通常学級での配慮などについても、個々の状況とアセスメントから更なる支援を工夫していただきたい。また、関係機関との連携も引き続き効果的に進めていただきたい。
特別活動	① 自己有用感を感じる集団づくり（学校行事等）	① 体育祭では、異年齢集団でのメリットを活用するため、各学年4つの団に分かれて行った。各団とも生徒が中心となり練習計画や種目の作戦を練り、多くの生徒が活躍できる行事運営を進めた。また、生徒の実状を考慮し、実施できる学校行事等の工夫を行い、生徒が達成感や自己有用感を感じることができている機会を創出した。	B	① 一人一人に居場所があり、安心できる集団作りに向け、主体性の伸長や、好ましい人間関係の育成のために、教育相談の充実を図り、対話を重視した指導を行っていく。これからも学校行事や学級活動などの見直しを進めるとともに、生徒の主体的な活動を促しながら過ごしやすい学級、学年、学校づくりに努める。	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価および改善の方策は適切である。 生徒・保護者が体育祭や文化祭などの学校行事を肯定的に受け止めていることから、生徒の主体性を大切に運営されていることが伺える。引き続き学校行事の教育的意義を見失うことなく、計画や運営において生徒を中心に据えた学校行事を検討してほしい。 生徒会を中心に学校生活を見直す活動を全校生徒で議論するなど、生徒の意思が尊重される取組ができています。特別な機会だけでなく、あいさつ運動や給食時や放課後の放送、図書室の開放、保健関係の活動など日常的な生徒会活動にもしっかりと取り組んでいる。
保護者・地域との連携	① 通信・HP・懇談会等による開かれた学校づくり	① 学級、学年、学校通信等の発行、PTAによる広報誌の発行やホームページの更新等により、積極的な情報発信に努めた。また、年3回のオープンスクール、地区懇談会、体育祭、文化祭、人権講演会、ハートフル講演会を実施するなど、教育活動を公開したり、保護者や地域の方と意見交換をしたりできる機会を設けた。	A	① 行事がマンネリ化しないようにその都度内容や計画、実施日時等を見直し、足を運んで良かったと思える取組を推進する。また、保護者や地域の方に積極的に関わっていただけるようにするため、オープンスクール等で実施するアンケートでの意見を参考にするなどしながら、取組を工夫したり、周知する。	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価および改善の方策は適切である。 オープンスクールを含む行事、学校通信「別中ありがとう」、HP等で積極的に保護者・地域へ情報発信がされている。今後も地域と一緒に行う学校地域協働活動の機会を設けるなど、地域に根ざした学校運営、保護者・地域と連携した教育活動の推進をお願いしたい。 地域行事に参加しようとする生徒の意識は、学校評価アンケートの結果から、高い水準を推移していることがわかる。今後も、別所町まちづくり協議会や学校運営協議会と連携し、地域の行事へ積極的な参加を呼びかけるなど、「ふるさと別所」を愛し、地域の一員としての自覚を持たせる指導をお願いしたい。
施設・設備の改善と維持	① 心癒される美しい環境づくり	① 授業に集中しやすい環境を整えるため、ロッカーの上に物を置かない、鞆はロッカーに入れるなど、整理整頓された教室環境の維持に努めた。また、生徒の成果物や行事の写真等を教室や廊下に掲示するなど、生徒の自尊感情や学力の向上をめざした教職員の校内環境整備に対する意識が感じられる。加えて、別所町老人クラブのご協力で校内に花を植えていただくことにより、さらに心癒される環境を整えることができた。	B	① 生徒のさらなる自尊感情や学力の向上を図るため、教室の整理整頓や教室や廊下の掲示を工夫したり、PTAや地域の方の協力を得て校舎内外を整備したりするなどし、落ち着いた美しい環境づくりをさらに推進する。また、生徒の校内環境整備に対する意識が定着するよう、教職員が率先垂範し、整理整頓を心がけ、きめ細やかな指導ができるよう取り組んでいく。	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価および改善の方策は適切である。 肯定的評価は生徒・教員とも上がっている。教職員が率先して美しい環境づくりを行うことにより、生徒も清掃活動やロッカーや机などの整理・整頓にしっかりと取り組んでいることがわかる。 大規模改修による環境整備により美しくなった校舎を維持するため、今後も4S（整理・整頓・清掃・清潔）の指導に力を入れてもらいたい。そして、美しい施設の中で、安全で、また安心して生徒たちが学校生活を送れるように、学校環境の維持に努めてもらいたい。
小中一貫教育の推進	① 9年間を見通した教育活動の工夫・研究（基礎・基本の定着をはかる学習活動）	① 今年度、小学校と合同で行う研究推進会議を立ち上げ、基礎基本の定着をはかる効果的な学習活動を、9年間継続して行うことを目標に定めた。具体的に国語科では書くことが得意になること、算数数学科では速く正確に計算ができるようになることを掲げ、モジュール学習や授業中の短時間学習で、漢字の小テストや計算の反復学習を行った。また、英語科では中学校でつまづきやすいポイントを小学校へ伝え、それを小学校で重点的に取り組む連携も始めた。	A	① 子どもたちの学力を個々の成長に応じた経年比較分析をしていく必要がある。全国学力状況調査や単元・定期テストの結果を見ながら、取組に効果が見られることは継続し、さらにブラッシュアップさせていく。取組の効果が薄いと感じられることは積極的に改善していく姿勢を教職員が持つ。	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価および改善の方策は適切である。 小中一貫教育の意義を教職員がしっかりと共有しながら、職員研修や児童生徒の交流が具体的に実践されている。特に、基礎学力の定着をはかる取組と生きる力の育成を2本柱に、小中一貫教育を効果的に活用した9年間の学びのスタイルが実践できている。また、カリキュラムの見直し、小中学校合同の授業研究や参観等も積極的に行われ、教職員の相互理解が深まっている。児童生徒の学びの質を高めることができるよう今後の取組にも期待したい。
	② 児童生徒の交流及び職員の合同研修・授業研究	② 目指す12歳・15歳の姿をすべての教員が意識して教育活動が行うことができるように、小中相互に授業参観を積極的に行うように務めた。合同授業研究会も行き、今年度は8年生の数学科の授業を通して、子どもたちの学力向上に必要な教師の手立てを考えた。また、児童生徒の小中交流を年4回程度行った。その結果、子どもたちのアンケートから中学校入学への心理的不安感の軽減が見られた。また、中学生も小学生が安心して中学校に入学できるように考えるようになり、人を思いやる心の成長も見られた。			